

小学校でのいじめとその取り組み

附属三原小学校副校長

浦島 啓

広大フォーラム前号(七月三日発行)で「いじめを考える」という特集が組まれている。そこには、学校だけでなく社会や家庭の問題として捉え、その解決策を考えている。ここでは、小学校という立場で「いじめ問題」にどのように対応しているか実情を紹介いたします。

一. いじめの実態をどうつかんでいくか

「集団で一人を、集中していやな思いに陥らせる」といういじめの現象は、高学年になるほど表面には出て来にくいものです。

しかし、教師は日頃から児童を観察することで、児童の変化をつかんだり(この力は、児童との交流で培われるものであり、教職経験が大きな要因となる)、児童間の人間関係情報をキャッチしたりしていじめの実態をつかんでいきます。

いじめの実態には定式はないが、次のような状況で起こることがしばしば見られます。

○**異質性から**
児童には、家庭で育まれた価値が彼の絶対的な価値です。そのため、自身と異なる価値に対してたいへんな不安を抱くものです。異質なものに遭遇するとき、新しい価値判断が要求されます。どうしていいかわからないときに、異質性に攻撃を加えます。しかも、個人としてだけでなく他者の同調を求め、し

つこく攻撃を繰り返すのです。

○**児童同士の間関係構築過程から**
児童は自身を認めてくれる友だちを作ることは言うまでもありません。しかし、三人が同時に対等な人間関係をつくることは、彼らにとつては非常に難しいことです。そこで、二人だけの人間関係を成立させるため、もう一人を誹謗中傷するという誤った人間関係の構築をします。

この時、児童の行動には、もう一人の所有物を隠すとか、欠点や弱みを第三者に言いふらすとか、多様な攻撃が見られます。この時第三者が言いふらした側に組みする場合、当人はいじめられる状況になります。

○**仲間としての連帯感から**
児童は、彼らの価値基準によって特定の集団を作りやすいのです。

だが、この基準が社会規範から外れることもあります。社会規範との整合を図って、自身の集団を抑止しようとするとき、本人は集団から外されます。

○**保護者の人間関係から**
児童は、その背中に家庭そのものを背負ってくると言われています。特に、低学年においては、児童のしゃべり方、他者に対する会話の仕方、しゃかり方、自身の持つ価値規範など、両親の保持しているものや様子をそっくり真似ていることしばしば驚かされます。学校という場で必然的に交流しなければならぬ親が、感情のもつれや誤解を持つとき、

それが児童に鏡のごとく映し出されることがあります。その結果が、一児童を攻撃し仲間から外していく行動を起こすのです。

いくつかの具体的な例を述べたのですが、教師が学級でいじめと判断される現象を観察した時、児童の人間関係に起因するのか、学級全体の人間関係にあるのか、家庭の問題が関係するのかなど、関係性を分析し原因を探ることを行いつつ、実態をつかんでいきます。

二. いじめ解決への取り組み

実態が把握されると、その原因の解決にあたっていきます。

解決のために、各学校でさまざまな取り組みがなされていることはいうまでもありませんが、本校では、児童の人間関係から起こっていると捉えた場合、児童指導(道徳の時間などを使う)で価値観の変容を迫る取り組み

を行います。

さらに家庭の場合は、子どもの実状を客観的に捉えるように、教師と保護者が納得いくまで話し合いを進めます。

カウンセリング、道徳の授業、保護者との連携、関係機関との連携、地域との連携など、児童にとつての阻害条件に一つひとつ地道に取り組んでいきます。

もちろん、日々児童の学級指導で、お互いがいやな思いをしていることをみんなの問題として考えあわせ、いじめに対する予防を行うと同時に、問題そのものが受け入れられる学級集団を構築するための実践研究が積み上げられていることは、言うまでもありません。「児童は家庭や社会生活をランドセルに背負って登校する」と言われていることからして、家庭・社会としっかりと連携を保ち、「いじめ」の解決にスクラムを組んでいきたいものです。(うらしま・あきら)

中学校で深刻化するいじめ

附属三原中学校副校長

松田正文

一. 社会問題としてのいじめ

いじめの問題が社会問題として大きくクローズアップされたのは、昭和五十八(一九八三)年以後で、校内暴力がマスコミによって取り上げられ、大きな社会問題として報道され、大人の圧力によって鎮静化し始めた頃、校内においては陰湿ないじめが始まっていた。以後今日に至るまで、このいじめの問題は、学

校の中で続いています。

陰に隠れて行われるいじめは、その加害者も被害者も、目立たない子どもの場合が多く、集団での無視やいやがらせなど、外からは何が起こっているのか見えなまま、被害者に精神的プレッシャーをかける傾向にあります。

そして、その実態がわかった時には、被害者は精神的に大きなダメージを受け、立ち直れないようなところまで追い込まれていることが多く、一方で、加害者の側は、集団での